

史料1 『松江市史』史料編7近世Ⅲ13

松平直政書状(大橋家文書)

猶以其元無事之由令満足候、^(大橋)かん斎、^(川崎)六郎左衛門ニも状ニ而可申候へ共、此段可被申候、当年者^(冷)ひへ候間、必無油断、身の養生かんようニ候、兵部そくさいニ能あいつめ申候間、可心安候、以上

此間者状ニ而も不申候、其元相替儀無之候哉、当地御静謐、^(家光)公方様・若君様御機嫌能被為御座成候間、可心安候、日光御成も延、来四月と申事ニ候、御社参以後者御暇被下帰国可有候間、るす中万事ためましき義、被存寄候義、何事も多んりよなく、^(不)九郎兵衛・権太夫・内膳などニも可被申候、^(朝日)丹波・少助などなく候へ者、万事其方兩人ひかへくれ候へ者、我々ためあしき義ニ候、当年国中風水ニ而下々いたシ、ものことふそく^(不足)の由ニ候間、^(金)たんかう候て可被申付候、謹言

(寛永20年(1643))
十一月廿七日

出羽守

直(花押)

大橋茂右衛門殿

堀尾但馬殿

史料2 『松江市史』史料編7近世Ⅲ14

松平直政書状(乙部家文書)

猶以、其元万事無油断可申付候、来年ハつゝミふしん、又御国まハリ衆御とほり候道なとつくり候ニ、何かととりこみ可申候間、必正月より片時も油断有間敷候、両年世の中もちかい申間、大かた二百せうともニきをつけ候てハちからつき申間敷候、左様ニ心へ尤ニ候、物成たらず候義、なきものを出かたく、ふんへつもれんゝの所ヲのひるてたてまでにて可有候、にわかニわきあたりてハ何とも成間敷候、御国まハリ衆五月はしめ其元へ御越可有候間、春中ニ道橋をもこしらへ尤ニ候、少も油断成義有間敷候、家中へもの成之義申いたし候者、^(家光)茂右衛門・^(編)但馬ニも申聞、^(編)たんこう可仕候、^(編)状ニも用之儀候者、^(編)たんかう可仕由申遣候、^(編)丹波・少助なども当年相はて候へ者、他^(編)国よりのほうへんも有ものニ候間、^(編)大キ成事ハおもひより少もいわせ可申候、以上

次飛脚越候間申候、其元相替儀無之候由度々被申越候、十五日之日付之状も参着、披見令満足候、^(家光)爰元御静謐ニ公方様・若君様御機嫌能被為御座成候間可心安候、御老中御ふるまい申事、御先聊次第ゝのび候て御さきへ御くり候故、きわまり不申候、料理こしらへ待候ニ、其朝にわかニのび候事までニ候、若君様御官参も少御ぐしニ御いたシ候てのび候、

左様二候へ者、其元当作ちかい候て物成さがり候事、何共可申様も無之候、天とうの事、又中国西国とも二ちかい候事二候間ぜひ二不及候、家中へ遣候儀も御心なう二可遣候、惣国三つ成二つ成二もやられ候方候間、世の中あしき上ハきようハ不入事二候、内匠・茂左衛門、半左衛門方より可申候、謹言

出羽

(寛永8年(1631))
十一月廿七日

直(花押)

乙部九郎兵衛殿

三谷権太夫殿

村松内膳殿

史料3 『松江市史』史料編8近世IV 第一章第二節14

(表家老たち↓松平直常)

覚

雲州松江表御国風不宜、委細申上度奉存候得共、事々物々二御座候条、詳難書頭御座候、
①畢竟年来悪敷成来候儀、中々一朝一夕之儀二而ハ無御座候、隆元院様(綱近公御事)御代より打続、善隆院様(先之君宜維公御事)御代御当代迄之儀、其内上御直捌之時分ハ善惡共二上之思召次第之儀、今更可申上様無御座、②近來幸千代(宗衍)様御幼年之内、御仕置之もの共入替、相勤来候得共、御先代之格を以相勤候内、先役之者共之取計候不弁善惡を茂先格日記等之書面を以勤来候、以前とハ時節も違申候へハ、仮令其節ハ相応之取捌二而茂、當時不相応之儀も御座候ハ、上古より之ならハしと伝承候、其上先格何ぞ間違之儀歟、又ハ上之思召違之被仰付等之儀二候も、書役之者共日記等二付置候故、右帳面を以取捌申候、③万事先格を以取計候得ハ、下諸役人二至迄留控等付置、随分見合念入書付候儀第一二相勤申候、先格与申候而も、本意依怙最眞之心御座候故、勝手二宜敷儀ハ先格を用ひ、勝手二不宜儀ハ自分心次第二仕候故、先格と計申候而ハ丁寧二御先代之儀を相守候様二相聞候へ共、本心依怙最眞二御座候故、諸事相違御座候、諸訴出候而も、控帳面或古例覚へ候者共を相尋候付、差無候事も日数を経申候故、番士之者共願等者番頭受込、仲満衆評二日を經漸差出候得ハ、又上役人共方二而日記留帳なと操せ申候故、前後日数懸り、大概二而ハ相濟兼、一統難儀仕候

(中略)

第一二申上度奉存候儀ハ、幸千代様御生立之儀千万奉氣遣候、至而御聡明二而、凡人之可奉及御様子二而ハ無御座御生質二被成御座候由、追々奉承知恐悦至極難有奉存候、④然所當時之役人共、其外御近習二相勤候者とも心得悪敷相聞申候、

(中略)

⑤尤此表之程ニより仕置之者共と對話仕覺悟ニ御座候、對話之上程次第江府へ何茂之内罷出、御家門様方へも及言上度奉存候、其節未御発駕不被遊内ニ御座候ハ、御在所へ罷出御逢も被遊候ハ、畏恐及言上度奉存候、若万々一不罷出候ハ、於江府近江守様より御噂可被遊候間、何分被廻御賢慮、何茂之内老兩人罷出候様ニ蒙仰度奉存念願ニ御座候、⑥畢竟役人共と確執ニ不相成候様ニと色々衆評仕儀ニ御座候、若確執ニ相成候而ハ、幸千代様御為以之外惡敷御座候

(後略)

史料4 『松江市史』史料編8近世IV 第一章第二節20

(端裏貼紙)

「表御家老

当職」

先頃表御家老共より当職のものへ被申出候趣ニ付、先達而申遣候通、有無之儀者一門中揃之上可申遣候、然処此節御家中郷町共ニ様々風説等申、人々不穩之由相聞候、此段者平生とても不宜儀、殊ニ右之一途ニ付左様之儀者公辺他国へ之聞江幸千代殿御為不可然義ニ候間、随分静謐第一各心遣有之様ニと存知候

史料5 『松江市史』史料編8近世IV 第一章第二節23

(松平直員↓松平宗衍)

(前略)

一、大和守殿より参候様ニ申来、早速罷越候処、兵部大輔殿・但馬守殿ニ茂相談之上、表御家老共存念之趣直ニ承可被申由、依之出府申渡候様被申聞、依之極人・伊賀江其段申渡候上、大和守殿より茂極人・伊賀兩人之内罷越候様ニ被申越伊賀罷越候処、大和守殿被申渡候者、私江被申聞候通、表御家老共出府之儀可申渡由被申候由、伊賀申候者承知仕候得共、出府之儀申遣候ハ、差当銀主之者共存念違茂有之、決而運送間違出来可仕哉、左候得而者差当り御当前之御勤方万端共御差支ニ相成、至極御為ニ不相成候段具ニ申達候得者、大和守殿被致承知、追而差図迄見合罷在候様ニ伊賀江被申渡候由、其後大和守殿江私ニ参候様ニ与申来罷越候処、兵部大輔殿・但馬守殿列座ニ而大和守殿より被申聞候者、表御家老共出府之儀、猶更被致相談候処、兎角出府之儀無用ニ可致之旨、依之書付を以被申渡候間、右之段私より茂可申渡之旨被申聞、極人・伊賀江被相渡候

(後略)

史料6 『松江市史』史料編7近世Ⅲ9

松平治郷書付(月照寺文書)

覚

朝日 神谷 柳多

大橋 三谷 乙部

右家督幼少二候ハ、家老並ニ申付、十七才以上者本格ニ可申付儀定

但、朝日家督之儀、以来神谷始五人之通り安永五申年申付ル、右五人之分ハ御隠居(宗衍)御代に宝暦八丑年右之通り相心得候様ニ被仰出候、以来違乱無之様ニ添役共へ者可申聞置旨申付ル

有沢

右家督中老、尤与力も有之儀、旁追而者家老ニ申付ル事、畢竟組外へ落不申様ニ可致儀定但、右之通り相心得候様ニ御隠居様御代被仰出候旨、已後違乱無之様添役共へも可

申聞旨

一、家老本格ニ申付候面々之家督中老ニ申付、其後段々代を経組附へ落可申砌、一旦者組外ニ申付、其者之跡ハ可為組付事儀定

但、右今村美濃家督之節儀定ニ候得共、違乱已後無之ため添役へも可申聞旨

右儀定申付ル

安永五申十月

当職

丹波

四郎兵衛

権大夫

縫殿

舍人